

幕末期における「藩」国家論の一考察

——柳河藩士三善庸礼著「御国家損益本論」について——

目次

- 一、はじめに
- 二、卷一について
- 三、卷二について
- 四、卷三について
- 五、卷四について
- 六、卷五・六について
- 七、卷七・十一について
- 八、むすびにかえて

長

野

暹

一、はじめに

「藩」という意識の形成については若干の考察があるが、ここでは「藩」国家という問題について検討しようと思う。^①

大名領域に関しては、「藩」概念よりも寧ろ「国家」概念が先行するとされるが、この概念が培われるにおいては、移封、転封の頻度が減り、大名の同一領域への支配が持続化される時期以降である。この意味では、旧族居付大名領で比較的早く形成される可能性がある。しかし、領域的なまとまりを「国家」として捉えるにおいては、幕府との関係を相対化することが前提とされるし、領域を主体とした政策論の展開が必要であろう。幕藩関係の中に分析的要素を見い出すとする場合においても、この観点からの考察が欠かせないであろう。鉢植え大名的意識や領域預り論に対して、「藩」国家意識が正当性をもつものとして主張されるにおいては、その内容の検討が肝要になってくる。つまり、これは幕藩関係に係わる論議であり、藩の位置づけに関する問題にも繋がるからである。

国家概念の形成においては、支配の正当性と、それを現実に支える諸機構や意識と認識のまとまりが必要とされる。大名が統治する領域を国家として把握されている場合、これらの問題が如何に論じられているかの吟味が必要であろう。そこで本稿では、柳河藩士の三善庸礼が天保十三年（一八四二）にまとめた「御国家損益本論」について若干の検討を試みよう。「御国家損益本論」^②については、すでに藩札論、国益思想などの観点から分析されており、鋭い考察がなされているが、ここでは「藩」国家という観点から考察してみようと思う。天保期という状況下において、「藩」国家認識の在り方を考察することは、維新変革期における思潮の解明にも繋がるものがあり、他方には、柳河藩政の幕末期の状況を理解する一端になると思われる。

(1) 「藩」国家については、林屋辰三郎『化政文化の歴史的位置』（林屋辰三郎編『化政文化の研究』岩波書店、一九七六年所収）、

横山俊夫『藩』国家への道——諸国風教蝕と旅人——（同書所収）、萩慎一郎「中期藩政改革と藩『国家』論の形成——米沢藩の明和・安永改革をめぐって——」（『歴史』五一号）。

- (2) 三善庸礼については、宮本又次「近世における富国策について 上」（大阪大学『経済学研究』九卷二号、一九五九年）に詳論されている。なお、「旧柳川藩志」（福岡県柳川・山門・三池教育会 一九五七年、のち青潮社より一九八〇年に複製）下巻六八頁、複製版七七六頁参照。

- (3) 「御国家損益本論」（以下本論と略記）は宮本又次編著、原田敏丸校訂「御国家損益本論」（清文堂 一九七三年）として刊行されている。また、「本論」は九州大学九州文化史研究所に写本がある。「昭和十二年二三日、柳河立花家蔵書写之」と巻末について書かれ、巻十一には、これが同年十月二十八日になっているので、昭和十二年六月から十月にかけて写筆されている。また、「柳河藩先哲遺著目録」（『福岡県史資料』第一 一九三二年 所収）には町野庸礼名で「御国家損益本論」と「国家勘定録」があげられており、「福岡県史資料」第三（一九三四年）には、「御国家損益本論」と「国家勘定録」の解題としてそれぞれの編別が示され、更に「柳河三善氏記録」として、「御国家損益本論」と、「国家勘定録」の一部が抄録されている。

- (4) 作道洋太郎「日本貨幣金融史の研究」（未来社 一九六一年）四章参照。

- (5) 藤田貞一郎「近世経済思想の研究」（吉川弘文館 一九六六年）二章参照。

二、巻一について

「御国家損益本論」とあるように藩を国家として論述しているが、柳河藩をこのように理解することは、その背景に立花宗茂が元和六年（一六二〇）に奥州棚倉から柳河に入部し、以降、立花氏が領有を続けたことより形成されたとみれる。藩を国家概念で把握することは、幕藩制的領有権が將軍に帰属するという原理からすれば、この領有原理を相対化することになる。つまり、藩領を独自化させるからである。將軍の公儀の預り領という認識でなく、領有が持続性をもち、あたかも、大名本来の領有地という形態をきたしているところに「藩」国家概念が形成されたとみれよう。この意識は、移封、転封の頻度が少なくなり、一定領地への定着化が進行した段階から出てくるであろうが、ここで問題は、天保期という時期に、この国家概念の下に、どのようなことが論じられているか、ということである。以下、検討してみよう。

「御国家損益本論」では、自序に「天・地・人・理・業・用ト次第ヲ分チ、其奥意ヲ不_レ泄書集メテ乍恐御国家御永久ノ御基本御急務ノ用、且ハ富国強兵ノ道ヲ明ニスルノ法ヲ教ヘ論スモノナリ、依テ一書トナシテ御国家損益本論ト題ス、則全部拾壹冊ニシテ子孫教戒ノ為ニ譲_二与之_一者ナリ」とあるので、藩の基本的な財政運営と富藩化の策を講じるために、書かれたものであることが窺える。

この書を著述するにおいては、「是予ガ積年肺肝ヲ碎キ心根ヲ尽シ愚意ヲ以テ丹精スル所ナリ」と記しているところから、永年にわたって思考し、心根を尽した所産であるので、一層、その意見に当時柳河藩がもっていた問題の所在と、その対応策が検討できる。

「本論」は、巻一から拾壹までの十一巻に分かれているが、各巻の内容は多岐にわたっており、統一主題の下に論述されていない。それゆえ、三善庸礼の視点を検討しようとする場合、必ずしも巻一からひもどく必要はないが、本稿では、順を追って考察することにしよう。

巻一の中に「於_二国家_一質素儉約ノ本ヲ正シ深く勘ヘ定テ、諸人ニ国益ノ廣大ナル国損ノ甚キ事ヲ教ヘ論ス仕方ノ事」という事項がある。国益つまり藩益をもたらずには、どうあるべきか、ということに對して、「万ノ事業ヲ勘定シテ国家ノ為ニ儉約ヲナスハ実ノ儉約ニシテ、則チ国益ノ廣大無量ナルモノ也^③」としている。儉約を主体にした方策を述べている。それは「物成ノ高ノ多少ニ随テ出納ヲ正シ」とあるように、量入為出ということを基軸にした考えから出ている。そして治乱の備をなすには、日頃から質素儉約を基本としてゆくことが肝要だとしている。冗費を省き、乱に對する準備をしておくには、儉約が欠かせないと述べる。この限りでは、特に新しい政策が開陳されているとはみれない。

三善庸礼の国学概念は後に検討するところであるが、その一端は「国益ノ本ヲ論スル事」と題する項目に現われて

いる。

皇国ヲ尊ヒ、天神地祇ヨリ伝ヘラル、所ノ誠直仁義ノ大道ヲ主本トシ、支那聖賢ノ五常忠孝ノ大道ヲモ加ヘテ是ヲ尊敬シ、専ラ仁政ヲ天下国家ニ行セラル、時ハ、天下ノ衆皆一ニ帰シテ、死ヲ以テ国恩ニ不レ報云事ナカルベシ、然ルニ於テハ、治国平天下ノ功著ク万代ニ可レ及ナリ、是神伝誠直仁義ノ大道ニシテ、国益是ヨリ大ナルハナシとある。⁽⁶⁾

ここで注目されるのは、「皇国ヲ尊ヒ、天神地祇ヨリ伝ヘラル、所」と皇国論が展開され、天地概念で論じていることである。幕府の絶対性は前提されていない。天下国家は文字通り天道の下における天下であり、それに基づく国家である。徳川氏の統治ということは、ここでは左程重きがおかれていない。ここに天下に対する国家として、藩が独自化された認識が窺われる。この国家の富国化を国益という概念で捉えている。この国益の追求においては誠実・正直であつて忠孝を旨とした仁政を行うことが治国平天下の道であり、国益はこれより大なるものはないとする。

仁政が肝要であり、施政者が善政を行えば、民はなびき、世が安定すると説く。ここに三善庸礼の考え方の基調が、仁政観にあることを見い出すことができる。施政者が行いを正し、善政を行うなら、民は従うという観点が基軸になっている。それは「国益ノ本」として、次のことを指摘していることから窺われる。

- (イ) 身ヲ謹テ為^ニ国家一大切ヲ顕シ以テ忠儀ノ道至レリトス⁽⁷⁾
- (ロ) 武士ハ仕官ノ者ナレハ事^ニ君誠忠ヲ尽シ(中略)忠義ノ道トス 是又国益ノ本ナリ⁽⁸⁾
- (ハ) 御国掟御法令ノ御条目・御制度ヲ堅ク守リテ無^レ狂^スト、能ク子孫ニ教戒ヲ加ヘテ誠忠ヲ励シ、公務ヲ重シ私用ヲ輕スルヲ以テ仕官ノ道トス、是又国益ノ本ナリ⁽⁹⁾
- (ニ) 穢ル、事ナク清浄ニシテ、貞実ニ忠勤ヲ可^レ励事、輕卒等ノ心得ナリ、是又国益ノ本ナリ⁽¹⁰⁾
- (イ) から(ニ)までにあるのは、武士・足輕についてであり、その説くところの要点は「忠義」と「忠勤」である。これ

に専念することが国益の本になると説く。忠節・忠勤を自明のものとし、それに励むことが基本であるという認識である。それゆえ、この明分論は、農民に対しては、その身分的役割に応じて分限を守ることにあるとする論調になる。

(イ) 国々ノ田畠山林ヲ領主地頭ヨリ預テ所持シ我物トシテ耕作ヲナシ、年貢諸納ヲ公ニ納メ其余レルヲ以テ人馬ヲ手当シ、農具ヲ調ヘ肥培ヲ用意シ公役ヲ勤メ、田畠ヲ求テ増加シ加ヘ耕作ニ精ヲ入ルヲ以テ年ニ増テ豊熟ス、故ニ国家豊饒ナリ、是ヲ百姓ノ忠儀ト云、則国益ノ本ナリ^(義)

(ロ) 百姓共田畠山林ヲ預リ、我物ニシテ秘藏シ肥培ヲ多ク入レ、精ヲ出シテ耕作ヲ励ニ及テハ(中略)家富栄ヘ子孫モ永久無異ノ化ニ可レ浴事顕然ナリ、是百姓ヲ助ケ弱キヲ軫シテ強トナスノ法、国益ノ大ナルモノナリ^(義)

(ハ) 百姓ノ力強ナレハ国家豊饒ニシテ安静ナリ、百姓力弱レハ国家衰微シテ困窮ナリ、故ニ国益ノ本ハ百姓ノ強盛富栄ニアレバ(中略)百姓ヲ助ケテ力ヲ満足セシメ、所務ノ増殖スルヤウニ可レ計事肝要ナリ、是国益ノ本ヲ正スルノ謂ナリ^(義)

とあり、農民は農耕に精を出し、年貢諸役を勤めるのが大切で、それが「百姓ノ忠儀」であるとしている。「国益ノ本ハ百姓ノ強盛富栄」と説き、農民の耕作が円滑にできるよう手立を講じることが肝要とするが、基軸は農民の耕作専念を求めるところにある。身分制的秩序を重じ、その分限に精を出すことに基調がある。この中において、注目されるのは、「田畠山林ヲ領主地頭ヨリ預テ所持シ」とあることで、農民は土地を領主より預けられているという認識をしている。藩を国家として把握していることからすれば、將軍よりの預り物という観点は出てこない。それゆえ、「百姓ノ忠義」という視角はあっても、大名よりの上位者との関係は論じられなくなる。

以上は、士、農についての言及であるが、手工業者に関しても論及している。

此工匠ノ面々己カ職分ニ精力ヲ励シ、其業ヲ修行鍛煉シテ細工ハ精密ヲ尽シ、都テ国用ヲ専トシ、余分ヲ以テ他邦ヘ出シ交易ヲナシ、或ハ壹代替テ他邦ノ金銀ヲ取集メ、大工・番匠・諸職入ハ自國ノ用向ナキ時ハ他邦ヘ至テ細工

ノ稼^ノナシ、金銀ヲ取集テ国益ヲナシ（中略）国用足り満ルヤウニ精ヲ出スヘキナリ

とあるように、手工業者もその職分に精を出すことを求めている。その場合、まず、藩内需要に應ずることを基本とし、余部は領外に売抜めて、他領から金銀をえることが肝要であると説く。こうなれば、領内で物質が満ち多くの利潤がえられるとして、「是工匠タルモノ国家ニ忠節ヲ尽スノ謂ニシテ国益ノ本ナリ」と手工業者の義務を論述している。物品生産により、領内に手工業品が満ち、他領に売ることによって利益がえられて、藩が富むとみている。

商人については、

町人商人ノ可ニ心得^ハ、自国ニテノ商売ハ都テ利潤ヲ輕ク得（中略）商ヲ多ク致シ、又他邦江ノ商売ハ都テ利潤ヲ重ク得（中略）商ヲ弘ク致シ

とあり、領内では利を貪らず、領外より獲得する心懸けを説き、「金銀米銭ノ融通自在ナル如クニ可レ計ナリ」と述べ、また、「御用金等仰付ラレバ速ニ差上ベシ、違背ニ及ヒ不納スル事ナカレ、是平常ノ利潤ヲ以テ国恩ニ奉レ報ノ訳ナリ」と御用金が課せられたなら、速やかに上納するのが国恩に報いる途であると述べている。商売の方法も利を貪ることに力点をおくべきでなく「大利ヲ貪リテ私欲ヲ恣ニスル事ナカレ」とし、「能々身ヲ謹テ正直正路ノ商売ヲ致ス時ハ天道神明ノ御恵ヲ蒙リ、幸福ヲ可レ得事顯然ナリ」とあり、あくまで実直な商いであることが肝要である、と主張している。

士・農・工・商の幕藩制的身分秩序を前提とし、それぞれの職分に応じた生活規範を述べているが、その根底にあるのは、廉直と誠実という観点である。これは施政者に仁政を求めることでもあり、藩内全体が仁に基づいて諸職分を全うすれば、領内は繁栄するとみている。

天保末期という社会的変動期にあつて、このような仁政と誠実を基調にしていることは、三善庸礼が進行している事態の変化を十分に認識していないことを示すものであろう。儒教的な分論の枠を出たものでない。それゆえ、所7

論は勢い抽象的で観念的なものになっている。

しかし、巻一の中で少々注目される事項がある。それは「他国ヨリ入来ル売薬ヲ其儘ニ措テ公ヨリ制出ス施薬ニ引換ル業ノ事」という主張である。領外から持ち込まれる売薬は、多額の金額にのぼり、利潤が領外に出るので、藩にとつては大損になるゆえ、他領の売薬が自然と領内で流通しないような手立を講じるべきであるとして、その方法を説いている。「薬種ノ上々品ヲ撰テ御取入有リ」と薬種の領内生産を行い、「其薬ヲ以テ他邦ヨリ持来テ売出ス直段ヨリハ半ヲ減シテ、國中一統家中町在ニ是ヲ配リ渡シ」と、他領の売薬よりも半価で販売するようにすれば「売薬ハ高直ニシテ功能モ少キ事故ニ、自然ト是ヲ嫌ヒテ不レ用事ト可レ成ナリ、是売薬ヲ不レ禁シテ自ラ退キ去テ、再ヒ入リ来ル事ヲ不レ得シムルノ謀ナリ」としている。

領内製造の薬が良質でしかも安価であることが前提された主法である。この主法を数字でもって説明している。

譬ハ他邦ヨリ入来ル所ノ売薬ノ代金凡千両分ヲ仕入テ持来リ、其利潤金凡五百両ニモ可レ及ナリ、此分ヲ利潤トシテ元千金ニ加テ千五百両ノ金銀ヲ取集テ国ニ持帰ル故ニ、顯然千五百両ノ損トナルナリ、然ルニ前ニ云如ク、不思議ノ業ヲ以テ売薬ノ道ヲ自然ト止ムレハ、則千五百両ノ国益トナル、夫ニ又千両分ノ薬ヲ制シテ他邦へ出ス時ハ、五百両余ノ利潤ヲ得テ元ニ合テ、千五百両余ノ金子ヲ取集メ来ルヘシ、然時ハ都合シテ三千両余ノ金ヲ得ルニ可レ至ナリ

とある。⁽²³⁾千両の元金で仕入れた薬で五百両の利潤をえれば、千五百両の金銀が領外に持ち去られ、千五百両の損失になる。しかし、領内で薬を造れば千五百両の国益となり、更に、領外で販売すれば、千五百両の金子をえることになり、合計で三千両の利益になるという。薬の国産化は、国産化以前に比べて倍する利益が得られるという見積をしている。

この思考は物産の国産化を説くものであるが、その論調は、すでに従来から主張されてきたものである。佐賀藩で

は、明和九年（一七七二）に開始された藩政改革で殖産政策にも力が入られるが、その政策基調は「一切之物産繁育」^③にあった。領内の自給体制を強め、領外から相対的に自立しようとする政策が展開された。藩政改革に際しての意見書である「御仕組八箇条」や、改革の具体的現われである「六府方」の設置に、それを見ることが出来る。

佐賀藩の明和藩政改革は、宝暦期に累積してきた藩借財に象徴されるような、従来の藩政の行き詰まりを打開することを目指してなされたが、その経済政策の主点は、領国経済の相対的自立化にあった。年貢米販売においても、大坂と領国での米価を比較し、運賃などを考慮して、少々大坂市場が高くても、そこでの販売は必ずしも有利にならない、という認識があった。また、非自給物資の自給化を促進し、領外からの購入を少なくして、金銀の領外流出を防ぐことが目論まれた。

佐賀藩の明和・安永期の藩政改革の基調からすると、その類似した主張を、この三善庸礼の売葉問題に見い出すことができる。しかし、三善庸礼の場合は天保期でのことであるゆえ、その時代的背景は異なっている。佐賀藩が明和・安永期に推進した経済政策は、必ずしも期待通りには進行しなかった。大坂市場からの相対的離脱は、領域での米穀市場の狭隘性と、江戸を中軸とした領主金融の構造から、遂に藩財政運営に支障を生じさせた。また、「一切之物産繁育」も早急に実現するものでなく、殖産政策の主点は特産物生産に置かれるようになる。これらのことのため、化政期には、再び大坂市場との連繫を強める政策がとられた。しかし、それは将軍家斉の大御所政治に象徴される出費増大などによって、藩財政運営を困難にさせた。その矛盾打開のために、新しい政策の施行が必要であった。このために断行されたのが、天保十三年（一八四二）から開始された藩政改革である。天保改革の経済政策の基調は、勿論時期によって異なるが、明和・安永期のような自給化体制を目指すものでなく、特産物育成とその交易に主点があったとみれる。

以上のような佐賀藩の藩政改革による経済政策の基調変化をみると、三善庸礼の主張する政策は、むしろ時期的に9

は明和・安永期のそれと類似しているとみなすことができる。そこに三善庸礼の国益論の時期的な限界を見い出すことができればよい。

諸物品の国産化論が国益論の基調になっていることは、次のことにもみられる。

「国々ノ産物ハ国益ノ广大無量ナルモノ也^{②8}」として、国産品に注目している。「御国ハ菜種辛子ヲ以テ第一トシ、茶、楮、紙、櫛、蠟、水油、酒、竹木、菓等之ニ次ナリ^{②9}」と国産品をあげている。その他にも芋、布、木綿、石炭など三三品目を列挙しており、それらは「国益ト可成モノハ国用ヲ便シテ、其余レルハ不洩他邦ヘ出シテ代替ヘ利潤ヲ可得ナリ^{③0}」と領内需要の充足と交易による利益獲得に言及している。

紙、櫛、菜種、塩硝の製法と販売にふれているが、「国用ヲ便シ」とあるように、領内での需要を満し、「国用足り満テハ、其余レルヲ集メテ他邦ヘ出シテ売捌クベシ^{③1}」としている。後者の場合は塩硝について述べたものであるが、他の国産品についても、ほぼ同じ主張とみれる。これを売捌の事例と関連させれば、三善庸礼の国産品の運用は、まず領国内の需要を充足させ、余分のものを交易に廻らす主張にあるとみれる。ここでは明確にこの関連を位置づけた論調ではないが、国産品の領外販売を第一儀としたものと異なることは、前述の論述から窺われるであろう。

巻一の中では、国政の基本的な在り方について言及している。「国政ヲ行事ハ四季ニ運氣ノ行ハル、ニ同キ道程ナル事ヲ可ニ弁知事^{③2}」という項目がそれである。その基調とするものは「君ヲ敬ヒ、下ヲ隣ミ、仁恕ノ道ヲ布キ施テ政ヲ為ニ及テハ、君臣合体シテ国家永久ニ可レ至ナリ、是国益之本ナリ^{③3}」と述べている。ここに展開されている主張は、仁政に基づく政治を基調にいた内容である。仁政が行われれば、君臣が一体して、国家が永續するとし、これが国益であるという。

仁政を行うべきことを五運六氣論から開陳している。木、火、土、金、水の五運は一年を司どり、厥陰風木、小陰君火、小陽相火、大陰湿土、陽明燥金、太陽寒水の六氣とが相生じるときは、天下国家に幸福をなすの喜びが出ると

している。「五運六氣君臣相生シテ、平氣ノ令トナシテ共ニ合体セシム、是ヲ平等調和ノ年ト云ヒ、静謐治世ノ年ト云ナリ、是誠直仁義ノ道専行ル、ノ故ナリ」³²と五運六氣論から説いている。その要点は「国政ヲ行フ事ハ相生相ノ理ヲ明ニシテ以テ仁義誠直ノ大道ヲ洽ク可レ行ナリ、是国益ノ大本ナリ」³³とあるように、仁義誠直ということが根底にある。仁政観に基礎づけられた所説と位置づけられよう。「人君ハ勿論、国家ノ重臣ハ身ヲ謹ミ礼ヲ重シ、汎衆ヲ愛シテ仁義誠直ノ大道ヲ施シ行セラルベキ也、是国益ノ専一ナリ」³⁴とある。ここでも仁義誠直が述べられている。藩を国概念で捉え、その利益を国益という表現をする段階において、国益の専一を仁政観に置いているところに特徴がある。仁政が強調されるのは、幕藩制初期であり、藩も公儀よりの一時的預り物であるという認識下で、公儀のためにも仁政を施すべきであるという価値観に裏付けられたものとすれば、「藩」国家の認識下における仁政観は、將軍の大公儀に対して、大名を小公儀と位置づける思考に関連していると考えられよう。それがゆえに、仁政が強調されることになる。ところで、ここに留意すべきことは、天保期においても、仁政観に基づく施政を説いていることである。

仁政が藩政の基調として貫ぬかれればよいが、それが必ずしも実行できない段階にあった。鄉村では、村方騒動に象徴されるように、村方内部の矛盾が高まっており、この矛盾は単に仁政的施策のみによって解決できるものではなかった。仁政論一般の域を出ないとすれば、現状認識が必ずしも深くないとみなせる。

巻一において展開されている論調は、天下に対する国家として、国家を捉え、この天下は一般的な天下であり、幕府をも超越したものである。「藩」が国家であるとする場合は、徳川氏に対しても独自の存在ということになる。この国家の利益これが国益という。国益をえる方策を主点にして論じているが、ここでは、「藩」国家が前提にされていることに留意すべきであろう。また「藩」国家統治の基調を仁政にしていることも特徴的である。

(1) 柳川藩については、池末美智子「柳川藩家臣団構成に関する一考察」(『九州史学』二二号)、藤野保「新訂幕藩体制史の研究」(吉川弘文館 一九七〇年)三篇四章、松下志朗「柳川藩初期の石高と年貢」(九州大学『経済学研究』四九巻四・五・六号)「福岡県史」11

三卷中（一九六五年）、「同」四卷（一九六五年）、渡辺村男「旧柳川藩志」（青潮社 一九八〇年）、永井新「柳川藩史料集」（青潮社 一九八一年）、岡茂政「柳川史話」（青潮社 一九八〇年）参照。

(2) (3) 「本論」三頁。

(3) (5) 同右九頁。

(6) (8) 同右三頁。

(9) (10) 同右一四頁。

(11) (12) 同右一五―一六頁。

(13) (15) 同右一七頁。

(16) (18) 同右一八頁。

(19) (20) 同右一九頁。

(21) (23) 同右二七頁。

(24) 同右一八頁。

(25) 拙著「幕藩制社会の財政構造」（大原新生社 一九八〇年）五章参照。

(26) (28) 「本論」二八頁。

(29) 同右三〇頁。

(30) (31) 同右三四頁。

(32) (33) 同右三五頁。

(34) 同右三六頁。

三、卷二について

次に卷二の内容を検討しよう。

卷二は一〇項目からなるが、これも卷一と同じように、統一的論点の下に体系的に著述しているというものでない。

順を追って検討するということもここでも進めよう。

まず最初の事項は「百姓ノ分限厚薄ヲ糺テ田畠ノ位ヲ見、其善悪ヲ考テ作物ノ盛衰ヲ知り、御取稼ノ多寡ヲ量テ出納ノ数ヲ積ル仕方ノ事」^①というものであるが、この中では、「百姓ノ力足ル時ハ国家豊饒ナリ、百姓ノ力不足時ハ国家衰微ナリ」^②として、農民が藩繁栄の基本であるとの観点で説いている。これは当然の視点であるが、要は農民存立にどう手立を講じるかにある。このような主張は施政者のとるべき態度として常に説かれるからである。

ところで、農民の力量を知るには「田畠・山林・開地等ノ持切ノ数ヲ正シ、又上中下ノ位・免合ヲ正シ、臨時物ノ多少ヲ正シ、貸付・取立金ノ有無ヲ量リテ分限厚薄ヲ可^③レ知」としている。田畑所持の状況や金銭の有無などから分限の模様を検討すべきと説く。この論点は更に次のように展開される。「有福ナル百姓ノ田畠ハ、土地肥タルカ故作物豊熟シテ実ハ入ヨク取稼モ莫大ナリ」^④富福な農民の田畑は良田であるとして、それは「人カ行届テ（中略）肥培ノ驗ヲ顕シ」^⑤ているためであり、田畑の手入が行き届いているためであると主張している。この観点は当然に田畑の品位付が現実と異なっているという論点に繋がってゆく。「有徳ノ者ノ所持スル田畠上タノ位ト成リ居ルトイヘトモ、矢張昔ヨリ極レル下タノ位ナレハ、上納ハ軽ク取稼ハ多ク作徳モ莫大ナレハ、位ヲ引替テ上タノ位トナシ」^⑥と富福者の田畑は上田が多いのに、その品位付けは下田となっていることがあり、そのため年貢は少なく、逆に貧民の取分は少いので、それを改める必要があると述べている。この主張は有毛検見段階のそれであり、年貢増徴のために適用されたが、三善庸礼は貧農の場合は、所持田畑が上田位付けでも、手入ができないので下田になっているゆえ、この場合は下田品位に訂正すべきとしている。単なる年貢増徴だけの主張とみることはできない。ここには一応現実に応じた主張があるとみなせる。

現実の分限に基づいた把握をするために積極的に分限改正を行う必要があるとして、それは領内全体に実施すべきと主張する。「御取立ノ侍分限改」など家中、寺社、町人、百姓、又内家来、非人について改正する手立を述べてい

る。

前述のことに続けて「御物成御所務配当横御物成之事」という項が設けられている。これは藩財政に言及した部分である。しかし、必ずしも財政運用について適切な所見が述べられているものでもない。

「御物成ノ御所務ト云ハ御領知ニ出来ル米穀ノ員数ニシテ、其米穀ヲ以テ公務御私用ニナサレ、其内ヨリ侍中諸御扶持人中ノ配当ニ渡サレ^①」とあるように、所務というのを本途物成のことを指し、「新田開地・山畑野開ニ出来ル米穀ハ御物成ニハ非ス、是ヲ横御物成ト云、浮キ所務ノ事ナリ、此横御物成ヲ以テ飢饉凶歳ノ御手当、且ハ非常ノ御備、御軍用金ノ御手当ニモ成シ置ル、前々ヨリノ御定ナリ^②」と本途物成以外の米穀上納部分を横物成として、飢饉や非常用備蓄及び軍用金に当てるものと述べている。

所務はどれほどあるかを見積っているが、柳河藩の領知高は一〇万九六〇〇石余であり、それを四ツ成として物成高は四万三八四〇石余になるとある。この配分は家中の切米、扶持米、役米、寺社配当などに二万四五〇〇石、残り一万九三四〇石を本方所務として大坂の廻米に当てる。米壹石を銀四五匁の定値段で金一万三五五〇両が得られ、そのうち、一万三〇〇〇両は江戸入用費になる。国元、大坂、長崎の経費は別途に田畠から取得するとしている。それは領中より菜種を田一反から五升上納させているゆえ、領中の田数が約五五〇〇町歩あるので、壹升を銀六四匁替にすると金一七六〇両がえられるが、これは参勤費用に当てられている。新田地は二〇〇〇町歩あるが、先年から一反に米二升を上納させているので、米四〇〇〇石が得られ、また菜種も五升徴収しており、一〇〇〇石の菜種がえられる。米四〇〇〇石、菜種三五〇〇石が別途所務として得られていると述べている。^③

横物成については、本来は非常用や軍用に貯えるべきものでありながら、近年は「御物入年増ニ相嵩ミ御本方ニ段々御加へ有ル故ニ、御臨時米金ノ分モ追々相減シテ御残ナク、非常ノ御備ヲ始トシテ諸御備へ御手当ノ分モ悉ク減シタルナリ^④」と藩財政の逼迫により、表方財政に廻わされ、本来の用途に当てられない状況にあるとしている。これを

改善するにはどうあるべきか。「御儉約ノ御主意ヲ立ラレテ御値有テ本ニ返サルル様ニ有度モノナリ」と儉約の主意をたてるとしか述べていない。重職重役は至忠を尽す心掛けが大切であり、「能ク己ヲ慎リ以テ誠忠ヲ可レ勵ナリ、是為^ル臣ノ道ニシテ御国益ノ大ナルモノ也」と己の慎みという範疇でとらえている。この限りでは、現実的な方策を言及することはできない。これは家中の人数に関して述べているのにも現われている。「御再城ノ時侍数ト当時ノ侍数トノ差別并当時御扶持人ノ員数ノ事」の項や「侍中内新参衆御人減ノ御側如左」という事項において、家中の人数が多くなっているの、増やさないように努めることが肝要であり、古参の者は新参を勞い、新参者は古参を敬い、新古が一致して忠勤を尽すことが国益の本であるという論述をなしている。これからすると、家中問題については、心掛け論の域を出ていないことになる。

実際のな政策という点では、有効性をもつような主張はなされていないが、領民と直接的に関連がある「水車之利害ノ事」という項目について、それを検討してみよう。「水車ノ働ハ莫大ノ国益ナレトモ」と精米したり、雑穀を粉にするのに役立つので、国益であるという理解をしている。国益概念が有用性という観点から捉えられている。それゆえ、不利益をもたらずにおいては、国益に反するものという理解になる。「御國中ニテハ冬ヨリ春ニ至テ夏毛ノ麦菜種辛子ヲ多ク耕作スル事ナレハ、井手川・井手溝堀ニ水ヲ湛ヘ水ヲ流シヤル事ナカレ、故ニ水車モ転スル事ヲ可レ禁ナリ」とあるように、麦や菜種の値付けが多く、川の水が田に入れば根腐れを起こして不作になるので、裏作の折は、水車を禁じるべきとしている。「水車ノ制ハ嚴重ニ極メ置レテ犯ス事ノナキ様ニ致サルヘキ事肝要ナリ、然ル時ハ国益ノ本ナリ」ともある。ここでは、菜種など裏作が順調になされることを国益の増加という観点でまとめている。国益という概念は、基軸的な作物の繁育というように主要な生産と結びつけたものであり、物産の繁育ということに力点が置かれていることが窺える。しかし、この国益概念というのは、藩の収益増というのに主点があることを留意すべきであろう。「御領中畠ノ上納ヲ増加ルノ仕方ノ事」という項で、畑は三毛作なので農民の取分が多いので、15

「此畠地ニ少シ上納ヲ増シ加テ御取納ニナル迎モ左程百姓共ノ難儀トハ成間敷^①」としており、これによって「御所務モ殖^ッヘ御国益モ莫大ナリ^②」とある。農民の作徳の増加ということでなく、藩の収益が多くなるのが国益と述べている。国益とはまず藩益としていることを理解しておく必要があるだろう。

いままで検討してきたことからすれば、三善庸礼の国益論は抽象的な内容が多く、現実的な所論の展開となっていない。これは藩政においても積極的に採用すべきものとは云えない。自給化体制を確立し、仁政が行われれば、藩は栄えるという主張は、富藩化の政策論としては内容の劣しいものとみなすことができる。

(1) (3) 「本論」三七頁。

(4) (6) 同右三八頁。

(7) (9) 同右四〇頁。

(10) (12) 同右四二頁。

(13) 同右四七―五〇頁

(14) (15) 同右五九頁。

(16) 同右六〇頁。

(17) (18) 同右六一頁。

四、卷三について

「御国家損益本論」の三について検討しよう。この巻は一〇項目よりなっている。まず、最初の「飢饉凶歳ノ時御領中ノ万民ヲ助救フ業ノ事」についてみると、次のような主張がなされている。

飢饉凶作の折に、備えがなくて周章狼狽し、多くの人命を失うのは「不仁ノ至リニシテ、天道ニ戻リ神明ノ明慮ニ背キ世上ノ人口ニ掛リ国家ノ恥辱ト成ルノ恐れ有レハ^③」と不仁であり天道と神慮に背き、藩の恥であるとしている。

仁政を基とした藩政を説く立場からすれば、当然の言明ということになるが、では、そうならないための施策についてはどうか。飢渴の者を救う手立として、次のことを掲げている。

國中ニ御手船ハ勿論大小ノ売船ヲ数多造テ、自國ノ不足ヲ補フ為ニ金銀錢或ハ人ノ食糧ト不_レ成、菜種辛子・油・蠟・榎実・竹木・石ノ類ヲ其船々ニ積ミ入レ、諸國諸島ヘ回シテ人々ノ食物ト可_レ成品ト交易ヲナシ、又ハ金銀錢ヲ出シテ食物トナルベキ物ヲ買取ラセ積来テ自國ノ潤トナシ、万人ノ飢渴ノ苦ヲ可_レ救、是皇國浮宝ノ徳ニシテ其益モ又莫大ナリ⁽²⁾

藩内の特産物である菜種・油・蠟・榎実などを食物となるものと他地域で交換し、また金銀を使ってでも食糧を整えることが大切だとしている。仁政を施して救助をしなければ餓死者が出て、国家の恥辱になるので、この危急を救う手立を重き役職の者は工夫することが肝要であると説いている。また飢渴を救う方策として困窮の必要を述べているが、その効用を論じる以上には出ていない。

困穀に次いで「御領中夏作麦菜種ノ作高ヲ極ル仕方之事」という項がある。ここでは、菜種は反に五升徴収していたことにふれているが、その収益が多いことを述べている。菜種は利益が多いので、富裕な農民は所持田の三〇%を麦で、残り七〇%は菜種を植付けているが、それでは凶作の折に食物の不足をきたすようになる⁽³⁾としている。

菜種油についても触れている。油値段が近年は高価になっているが、これは町人がつり上げているのであるとしている。「油屋如キ卑賤ノ者ヨリ自由自在ニ扱レテハ士ノ道難_レ立⁽⁴⁾」と身分意識を露骨に出して「油ノ価ハ上ヨリ年々御定メ可_レ有事也⁽⁵⁾」と藩が価格統制を行うよう求めている。その理由は、「下直ニ定メ、諸人ノ難儀ニ不_レ成様ニ油ヲ潤沢ニ致ス肝要ナリ⁽⁶⁾」と低価格にすることが大切としている。この理由は、油が領内に行きわたることにある。「御国モ菜種辛子ト油ハ御國産ノ内ニテモ別_{ツキ}テ貴キモノナレバ、御領中ニテハ辛子モ油モ潤沢ニシテ価モ下直ニ御定メ有リテ諸人モ欲_レブヤウニ成サレ⁽⁸⁾」と領内需要に応じることに置かれている。領外に出して利益をえることも留意すべきとし

た上で「^{ウルホヒ}自国ノ潤自国ノ助ヲナシ、他国ノ利潤ヲ取りテ国家ノ益人トスノ智略ハ重キ職役ノ人ノ肝要タル所ナリ」と領内の需要充足と領外販売による利益獲得が肝要としている。

三善庸礼の国益論は、藩内の秩序が整い、物産の繁殖が円滑にゆくことに主点があることが窺える。このためには、藩重職者には不正のない施政を行うことを説き、家中には侍たる身分を自覚して行動することを求める。幕藩制下における身分秩序を重じ、その規範に領民が従うことが肝要という認識である。新たな価値観に基づく国益論では必ずしもない。藩国家の安定は幕藩制的秩序が整えば可能という思考である。ここに、彼の強烈な仁政意識が打ち出されるゆえんがある。人を選ぶにおいては、「内願等ノ欺^{アサムキ}ニ乗シテ取り計ヒ有テ命セラル、時ハ利慾ヲ恣ニシ、上ヲ蔑ニシテ上ノ物ヲ掠奪ヒ、賄賂ヲ取り栄花ヲ極ル不忠不義ノ悪行ヲ働クニ可^⑩レ至ナリ」と恣意的な任命であれば、利慾のために行動し、賄賂を取るようになり、不忠不義の悪行を働くに至るとしている。不忠不義という表現に三善庸礼の認識を見出すことができる。

次に塩について述べている。「塩ハ於ニ御国ニ産ノ物ナリ」と塩は産出していないが、塩は不足しないようにすべきで、その手立は「産物ノ直段高ケレハ売捌テ其価ヲ以テ塩ヲ多ク買入積来リテ売捌クヘシ」と領内の産物を売捌いて、その代金を以って塩を買入れることを主張している。そして、こうなれば「交易ヲ致ス時ハ利潤ヲ莫大ニ得ルノミナラズ塩國中ニ満足テ価モ安クナリ諸人為ニモ有益ナルヘシ」と交易によって、塩が領内で潤沢になるとしている。ところで、塩問題にふれている中で、藩役人の心得について述べているが、それは忠節を基軸にした内容になっている。

町人商人ハ利潤ヲ得テ世渡ヲナシ生活ヲ営ムル主意ナレハ、役人ノ心ヲ迷シ思フ儘ニ利ヲ得ル事ハ有内ナレハ、役人タル人々ハ忠節ヲ心中ニ持シ我神靈ク明鏡ノ輝カシ、無^⑪レ迷無^⑫レ惑無^⑬レ移無^⑭レ乗不動ノ位ヲ定メ、嚴重ニ役ヲ守リ身ヲ謹テ精勤ヲ可^⑮レ遂事当前也

忠節を第一義にして役を勤め、商人に惑わされないようにすべきと説いている。不正を行つた役人に対しては「速ニ其役々ヲ追退ケテ器量有人ヲ撰テ其代役ニ命セラルベキナリ」と罷免し、有能な人物を代わって任命すべきとしている。そして「是不正ヲ改正スノ仕方ニシテ能ク此法ヲ斟酌セラレテ用ヒ玉ハ、亦国益ノ大ナルモノナリ」と不正を改めることが国益であると主張している。

国益概念もこの点からすれば、かなり幅をもって用いられていることが窺える。忠節の念で不正を直すことも、国益の範疇に含まれているが、これよりすれば、廉直な施政それが国益ということになる。商人の横暴を抑え、物品の高値をきたさないようにすることが肝要とするが、その基調は統轄の立場にある者の態度である。しかし、三善庸礼の主張は、抽象的であり、現実に俗つた政策論とはならない。侍が利を貧るようであれば、「御国政モ自然ト衰ヘ御法ヲモ不レ守様ニ可ニ成行」と法秩序が乱れると述べ、

侍ハ侍ノ道ヲ守テ町人商人等ノ真似ヲセズ四民ノ差別ヲ正シテ四民ノ長上タル所ニ本テ忠義ヲ専ニ尽シ、国家ノ益ヲ可レ成事は侍ノ侍タル所以ナリ

と、侍は商人の真似をせず、士農工商の身分秩序の最上にあることを自覚して、忠義を専にして国益を計るべきこと、これが侍たる者のなすべき基軸であると論述している。

総じて、三善庸礼の国益論は、身分秩序を重じ諸物産の国産化を説くところに基調がある。「炭薪材木竹ノ類ヲ御領中へ潤沢ニ成ス仕方ノ事」の項における論調に、後者の事項を窺うことができる。

御国産ノ炭・薪・材木・竹ノ類潤沢ナラシメテ国家ノ用ニ備ルノ道立ヲ創業セシムヘキナリ、御国産ノ品物國中ニ潤沢ニナリテ行渡リ、万民日用ニ不^レ苦シテ価易ク喜^{ヨロコビ}ノ眉ヲ披^{ヒラ}ク時ニ至テハ、御国産ノ品物モ自然ト増殖繁昌シ、国用ヲ弁スルノミナラズ、有余ハ他邦へ遺テ高ク売捌^{ウツ}ラナシ金銀ヲ取集メ、或ハ自国ニ無之品物ト交易ヲナシ、免角他邦ノ利潤ヲ重ク得ルノ勦^{ウツ}ヲナサシムル心得肝要ナリ

とある。¹⁹⁾炭・薪・材木・竹の繁殖を説き、これは国産品の潤沢な育成一般にまで及ぶ。国産品が領内に行きわたれば、20

他領で販売し、金銀や非自給的物品をえることができるゆえに、国産品の増殖が肝要であるとしている。ここにも示されているように、領内における物産の潤沢さが藩国家の豊かさをみる基準という思考があると解せられる。特産物生産に主点をおき、その領外販売で金銀を獲得し、非自給物資を購入して、領国の再生産基盤を安定化さすという認識ではない。いわゆる重商主義的思考が形成されているとはみなされない。天保期には、各藩は特産物生産に力を入れ、藩専売制が新たな展開をみせ始める時期であり、諸物産の繁育に必ずしも重点をおいていない。

三善庸礼の国益論が領内での物品潤沢を基調にしていることは、米穀の販売についての言及からも窺える。

自国ニテハ米穀ヲ能ク融通ナサシメ、米穀ノ直段ハ年ノ豊凶又関東・奥州・北国・大坂其外中国・四国 九州等ノ作並ヲ考ヘ相当ニ立ヘシ、是国ニ益ヲナスノ謂ナリ、又他邦ヘ至テ米穀ヲ商フ事ハ手広クシテ利潤ヲ貴ク設クヘシ、然ル時ハ国益莫大ナリ、是商ノ主意也

とある。²⁰⁾まず、自領内に米穀が潤沢に流通することを求め、米価は豊凶や他地域の状況を考慮して設定するようにとしている。これが国益と説く。他領で米穀を販売して利益をえることも論述しているが、主きは領内の需要を充足させることにおかれているとみなせる。領国経済を重視するとしても、産物の生産は説くが、一般論の域を出ていない。抽象的であり、現実に対応策となっていない。思考の産物としての国益論でしかないと受け取れよう。

三善庸礼の国益論は、仁政観に基づく物産繁育に重きがおかれているが、巻三においても、それがよく出されている。「賄賂ノ行ハル、ハ国政ノ乱ル、基ナリ、依テ賄賂ノ道ヲ絶塞ク仕方之事」や「於公儀配当扶持方御渡之御例ヲ以テ勘訂之事」などの項目から窺うことができる。

「上ニ立人ハ五常忠孝誠直ノ大道ヲ身ニ脩メ守リテ下ニ立モノ、鏡ト成リ」²¹⁾と藩重職者は修養に努め、誠実であるべしとしている。

青山下野守は老中のときも音物を一切受納しなかったので、賄賂の贈り物を人々には行わずにいたと述べ、「重職重役ノ人ハ勿論、諸ノ役ヲ勤ル面々モ青山侯ノ御行状ヲ鏡トシ、臣下ノ面々ノ潔白ナル所ヲ手本トシテ学テ自得可_レ有ナリ、是国益ノ本ナリ」と潔白であることが国益の本としている。国益をこのような内容において把握するのは、政治の基調を仁君的行政に求めているからであろう。

仁政について、幕府が旗本などに蔵米を配当するに際して、大身には下位米、中身に中位米、小身には上位米を与え、米価下落の折は救金を支給しており、「下ヲ御憐ミノ御仁政誠ニ難有次第ナリ」と述べている。政治の基本を仁政にしていることが窺える。それゆえに、

公儀ノ御仁政ノ御仕方ヲ含マレテ御改革有ハ、衆人感服シテ懷キ随ヒ奉ル事、風ノ草木ヲ偃スカ如ナラン、然ル時ハ為ス事不_レ利ト云事ナク国益モ又大ナルベシ

とある。仁政を基調にしていることが、ここでも現われている。仁政観による政策論であるために、その所論は勢い抽象的で道徳論的なものになる。後にみるように、巻九から十一に、それがよく示めされている。三善庸礼が、政治を仁政によって行うことが現実的可能とみているところに寧ろ問題があろう。幕藩初期とは状況が大きく異なり、仁政では処しえない段階にあるからである。

(1) 「本論」六三頁。

(2) 同右六三一―六四頁。

(3) 同右七〇頁。

(4) (6) 同右七二頁。

(7) (10) 同右七三頁。

(11) (13) 同右七四頁。

(14) (16) 同右七五頁。

(17) (18) 同右七六頁。

(19) 同右七八頁。

(20) 同右八〇頁。

(21) (22) 同右八五頁。

(23) 同右八六頁。

(24) 同右八七頁。

五、卷四について

「本論」卷之四の考察に移ろう。ここでは九項目にわたって論じられている。最初は「諸役所・諸役方前々ヨリノ致来ノ善惡ヲ糺明シテ改革之事」という項目である。ここでも「不善不法ノ仕来リハ除ケ去テ用ユベカラズ」とあるように、廉直に主きを置いた論述になっている。従来役方においては不正の算法が行われ、これが大きな損失を招いているとしている。四捨五入の問題にふれ、五より上は一とし、それ以下は切り捨てる算法をとりあげ、四が十集まれば四十となるように、切り捨てられた部分も集積すれば多量になるのに、従来は、この部分を私欲のために意識的に切り捨ててきたので、「只今迄仕来ノ曲ノ不正等ヲ廢シ不正算ヲ施シ用ヒ居ル面々ヲ追退ケラルベキ事御国益ノ尤大ナルモノナリ」としている。廉直と実直を主にした国政という観点がここでも出ている。仁政観的国益論である。

この論点は「諸ノ役儀ヲ勤ル人ノ心得ヲ改メ正ス義論之事」という項目でも繰り返して出されている。藩士が諸役を勤めるのは、国家主君、数代の重恩への報い、我身とる孫永績、私利私欲の四つのいずれかであり、前三つは忠孝のためなので、本来的なものである。「国家ノ為ニ命ヲ輕テ誠忠ヲ尽シ、廉直貞実ヲ本トシテ、上ヲ敬ヒ下ヲ憐ミ、粉骨碎身シテ勤勞ヲ不厭ヲ役々ノ本意ト云ヘシ」とする。忠を基軸として勤めることを説く。「孝ノ道立時ハ忠道ニ叶

フ以所ナリ」⁽⁵⁾とあることにも表現されている。この観点からすれば、藩政初期の治政を良しとする論調になる。

昔人ハ質朴ナルカ故ニ今時ノ人トハ雲泥ナリ、夫レ役ヲ勤ル者ハ先ツ言行ヲ正シ身ヲ慎ヲ以テ己カ任トシ、仮初ニモ不忠不義ノ挙動ヲナサズ、家宅ヲ不_レ飾、美服ヲ不_レ着、美酒美肴ヲ不_レ飲_食、随弱放蕩ノ所業ヲ不_レ致一切驕ケ間シキ事ヲ慎ミテセズ、一分ハ貧ク暮シテ家内睦ク上ヲ敬シ下ヲ憐ミ、朋友ニハ信実ヲ以テ交リ、役ハ廉潔貞実ヲ本意トシ、身命ヲ抛テ忠勤ヲ励ミタル事ナリ

とあるように、⁽⁶⁾昔時は清廉実直で忠勤の励げみがなされてきたと強調する。仁政が行われていたという視点である。この認識からすれば、現状は乱れているということになる。次のように指摘している。⁽⁷⁾

然ルニイツトナク其廉直清潔ノ風儀替リテ今ニ於テハ其形モナク、役儀ハ佞奸媚諂ヲ以テ命ヲ蒙リ、私欲竊盜ヲ挙動ヲ以テ己カ任ト心得、忠孝仁義ノ大道ヲ廢ルカ故ニ不忠不義ノ惡道ニ陥リ役ヲ勤ルト云

廉直満潔の風儀がすたれ、役職は媚びへつらう者に与えられ、私欲がはびこり、忠孝仁義の大道が廢れていると指摘している。藩政初期は忠孝の道が行われ、仁道が施こされていたという理解からすれば、現状は否定されるべき要素が多いということになる。三善庸礼が重きをおいているのは忠である。忠を基軸にした観点であることは、天保期という時期には空論的な論点が多くなる。初期を善とすることなどは、その現われであろう。これからすると法度を守り、秩序を正すことは欠かせないという認識になる。「諸士衆民江御国法ヲ教ヘ守ラシムル仕方之事」という項目には、それが明示されている。

「国法ノ本ハ天下ノ御政道ニシテ是ヲ皇国神伝ノ大道ト云」⁽⁸⁾とし、この国法を遵守すべきことを説く。ところで、ここで注目されるのは、国法となる基礎を皇帝にしていることである。

御法令御制度ノ起源ハ天神ヨリ^{アマノカミ}皇帝ヘ伝ヘラレ、代々ノ將軍受繼レテ国々ノ諸侯・領主・地頭等ヘ伝ヘテ行ハセラル、神伝ノ大道ニシテ御国政ノ本ナリ、是ヲ以テ法度ヲ制シ上下尊卑ヲ分チ善惡邪正ヲ糾シ賞罰ヲ明ニス、則是ヲ

総テ国法ト唱フルナリ

とある。⁽⁹⁾ 国法の起源を天神に求め、それより皇帝に伝えられ、更に將軍に継受されて、それから領主や地頭に伝えられていくとしている。この天神が日本化されたものであることは、

往古神代大日国高天原ノ皇都ニ於テ天照皇大神・高木神ヲ奉^レ始八百万ノ神等心ヲ合セ神法ヲ撰ミ神法ヲ定メ、誠直

オオヒノクカマノハラミヤコ

ノ大道ヲ施テ衆ヲ教ヘ、勸善懲惡ノ業ヲナシテ衆ヲ喜ハシメス衆ヲ畏ス、是ニカタドルニ玉・鏡・劍ヲ以シ此三器ヲ三種ノ神器トス

とあるように、⁽¹⁰⁾ 「天照皇大神」ら八百万の神が神法を定めたということをあげている。天道論による天概念とはいささか論調を異にしている。国学に系譜するものともみなしえる論調である。

ニギハヤヒ

瓊々芸尊ヲ奉^レ始皇國ニ属シテ降臨ス処ノ功臣ノ神等ニ神法ヲ授ケ、此神法ヲ代々ノ皇帝受継シ、又代々ノ臣等命ヲ受ラレテ施シ行ハル、事今ニ至テ盛ナリ

と「瓊々芸尊」に言及し、降臨した神々に神法が授けられ、それが代々の皇帝に受け継がれてきたとし、日本固有のものとしている。それは、

然レハ他邦ノ道ヲ以テ神代ヨリ已来、^{コノカタ} 応神帝ニ至テ神道ノ政事ノ助ト致サレシ事ナシ、併 応神帝已来モロコシノ

文学渡来シテ文化盛ニ開ケ、学問ノ通行ル、ニ及テモロコシノ風儀ヲ移サレ、聖賢ノ教ニ依テ、皇國神伝ノ大道ニ

附属シテ國政ヲ天下ニ洽ク行ハル、事トハナレリ、然レトモ其本ハ神代相伝ノ神法ナリト知ルヘシ

とあることにも現われている。⁽¹²⁾ 「モロコシノ文学渡来」し文化が盛んになったとしても、「本ハ神代相伝ノ神法」であるとしている。

三善庸礼の「藩」国家概念の基調は、このように、日本書紀や古事記に由来する天下形成論である。この点からすると、徳川氏は相対化されることになる。天保期という状況において、国学的思考で天下を捉え、「藩」国家を認識

していることに特徴を見出すことができる。徳川氏を公儀的存在とすることは基軸とならない。「天」の認識もいわゆる天道論的なそれではない。⁽¹³⁾ 天の理という一定の合理的認識に連なる思考ではない。それゆえ、神法を天神に求めているとしても、天道論に系譜した論調とは赴きが異なる。「天照大神」が出される限り、將軍の絶対性は、この限りでは確立しない。藩を国家として把握し、その富藩化を考える思考にあつては、將軍も相対化される。国学論がそれを基礎づけているとみなせる。

国法をこのように位置づければ、必然的に不変性が求められることになる。「此国法一度出テハ再ヒ改メ不レ替ヲ以テ善トシ⁽¹⁴⁾」という指摘がなされるゆえんである。天神に由来する国法ゆえに容易に変えがたいものという位置づけである。天神から伝受されたということは、皇帝の位置を高めるものとなる。

御国法ハ皇帝ヨリ出テ將軍ニ伝ヘ、將軍ヨリ諸侯方江伝ヘ、諸侯方ヨリ万民ヘ伝ヘラル、勅命ト云事ヲ上下万民能ク弁テ謹テ是ヲ能ク守リ、決テ犯ス事ナキ様ニ何モ恐レミ惶^{カシコ}ミ敬フ心得ト可⁽¹⁵⁾レ成

国法を勅命という視点でとらえている。それゆえ、恐れ敬つて守るべきという論述になる。「是ヲ犯ス者有テ征伐糺明セラル、時ハ勅命ニ背ク事ナレハ朝敵ナリ、朝敵ノ罰ハ尤重シ⁽¹⁶⁾」と朝敵という言葉で国法違反者をとらえ、朝敵の罰は最も重いとし、朝廷の絶対性を出す。この限りにおいては、將軍は朝廷の下位者であり、そこに絶対性は見い出されていない。天道論に由来する必然的論調ともみれるが、將軍の公儀性が出ていないのは注目されよう。

後陽成帝深ク叡慮ヲ回ラサレ、東照神君ニ勅命有テ、関ヶ原・大坂ノ大乱ヲ鎮メ治メ、天下国家ヲ平定シ震欽ヲ奉⁽¹⁷⁾レ安、随テ諸侯四民ノ安住ヲ極メ是ヲ懷クルニ六誠直五常ノ大道ヲ施シ行ヒ賞罰ヲ明ニシ、三器ノ神徳ヲ主トシ皇帝ノ御徳儀ヲ四海ニ輝シ、御仁政ヲ布キ施シ武威ヲ皇國中ニ治カラシメ玉ヘハ、万民御恩沢ノ有難ヲ不^レ忘、謹テ賞ヲ喜、罰ヲ恐レ、守モノ多ク犯スモノ少シ、是天下ノ御法ノ能ク下ニ及ヒテ行ハル、所ナリ

とある。ここでは、後陽成天皇の勅命によって、徳川家康が天下を平定し、それによって諸侯四民が安住できるよう25

になったとしている。「後陽成帝ノ叡慮、東照神君ノ御仁徳」と天皇の叡慮が持ち出されている。秩序意識では、天
皇―將軍―諸侯―庶民という序列である。

三善庸礼のこのような認識は天道論に基づくものとみれるが、それは仁政を中軸に豊蔭論を展開する論調とも関連
していると指摘できよう。天皇主権の確立を求めてゆく尊主論に容易に傾斜する内容であるとみれる。天皇と將軍の
国政権の帰属をめぐる論議ではないとしても、天―皇帝―諸侯という秩序を前提にした認識が基軸にあると理解でき
る。ここに、天保期における「藩」国家論として注目される要因がある。天皇は徳川氏に命を下だす上位者であり、
それは、天に由来するものとして、寧ろ絶対性をもつものとなりえる論調である。

しかし、神法を天照大神に由来するとし、その不変性を説きながら、施政の基調を仁政においているところに、儒
学の天道論に基づく施政論が反映しているとみれよう。天下形成を天照大神に求めながら、施政を仁政におく限り、
幕府との関係で「藩」を位置づけという認識までには発展することは必ずしも容易ではない。ここに、三善庸礼の
富蔭化論が抽象的で具体性が劣しい要因があるとみれるだろう。

(1)・(2) 「本論」九三頁。

(3) 同右九五頁。

(4) 同右九七―九八頁。

(5) 同右九八頁。

(6)・(7) 同右一〇〇頁。

(8)・(9) 同右一〇一頁。

(10)・(12) 同右一〇三―一〇四頁。

(13) 水林彪「近世の法と国制研究序説―紀州を素材として」(『国家学会雑誌』九〇巻一・二号 一九七七年)。

(14) 「本論」一〇一頁。

(15)・(16) 同右一〇二頁。

六、卷六について

「御国家損益本論」卷之五について検討しよう。ここには五項目について論述がなされている。最初は「文武ノ道ヲ学テ盛ニ行ハシムル心得ノ事」というものであるが、この中で、実学についてふれている。⁽¹⁾

実学ハ国家ノ重宝ナリ、実学ヲ修業スル人ハ身ヲ脩メ家ヲ斉ヘ国ヲ治メ天下ヲ平ニスルノ器量ヲ生ス、故ニ実学ヲノミ学テ無多骨ヲ折ノ過チナク、常ニ静寂トシテ為「国家」有益ノ事ヲ尽シテ忠道ヲ後世ニ伝フ、故ニ国家有益ノ重宝ナリ

ここに云う実学とは、真実の学という意味である。「虚学ヲナス者ハ天下国家ノ罪人ナリ」とあるのに対応している。「聖賢ノ教ヲ学テ聖賢ノ大道ヲ不レ守、無益ヲ主トシ不義不忠ヲ働ク、是ヲ名ケテ国賊ノ儒者ト云ナリ」としているように、孔猛の教を守り、身を修めることが肝要という論調である。これからすれば、現今は実学を修める者が少ないという認識になる。昔時を良しとする発想に基づくからである。「聖賢ノ書ヲ続ミ同ク道ヲ学フ人多トイヘトモ実学ニ本イテ学ブ人希ナリ」という論述などは、さしづめ、その一端を示すものであるう。

仁政を主きにおいた論調は、施政者が範を示すことが肝要という言及を生みだす。「御儉約ノ御手本ヲ出サレテ一統ヘ示サレ、何レモ御儉約ノ御手本ヲ習ヒテ修行可⁽²⁾致事」という項目に、それが示されている。

「儉約ト云ニモ実有リ虚有リ」と儉約に虚実があるとして、実の儉約を行うには、施政者が範を垂れる必要があるとする。「上ノ御儉約ヲ以テ諸人ノ手本トナシ、二六時中不⁽³⁾怠ニ人々守リ行フ様ニ有度事ナリ」と述べている。施政者の行いが、まず大切であるとして「上ヲ学ブ下ナレバ上ノ好マル、事ハ下モ是ヲ好ミ」と述べて、「上モ下モ共ニ

一和シテ質素俟約ヲ用ル時ハ行ハレズト云事ナク遂ゲズト云事ナカルベシ⁽⁸⁾と上下一致すれば、俟約がなりたつといふ見解である。

田地所持に言及しているので、それを検討しておこう。

田畠は本来百姓のものでないのに、勝手に質入れなどをしているが、これは禁止すべきとする。売渡した田地の買戻しのために、銀子を貸与し、受け戻しがなされれば、百姓は耕作に努力するとしている。

ところで、田地を売却せざるをえなくなる要因については、次のように指摘している。⁽⁹⁾

厚薄貧富ノ事ハ天道ノ然ラシムル処、神明ノ禍福セラル、所ナレハ、善ヲナス者ニハ是ニ幸福シ、悪ヲナス者ニハ災禍ス、是不同ノ謂ナリ

天道觀に基づいて貧富の要因を述べている。善者は福になり、悪者には災禍がきたるという。天道觀に由来した認識は、勤勉な者には幸福がおとずれるという考えをもたらし。「身ヲ謹テ誠ノ道ヲ行ヒ家内睦ク農業ヲ励ミ俟約ヲナス者ニハ天道是ヲ憐ミ、神明是ヲ助テ幸福ヲ与ヘ玉フヘシ⁽¹⁰⁾」という論述がそれである。

卷六の中で注目されるのは、藩札について論述していることである。⁽¹¹⁾

藩札は明和の頃に幕府が十五年を期限として流通を認め、それがために九州の多くの諸藩は願ひ出て流通させていたが、二、三度願ひ出ただけで、其後は内密に発行していると指摘している。そして、藩札は流通を円滑にすべきで、そのためには銅銀の準備が肝要と説く。「札ノ制度ヲ立、法則ヲ極テ融通ヲナサシムル事專要ナリ、左ナキ時ニハ国家ノ益トナラズ却テ害トナル基ナリ⁽¹²⁾」ときわめて流通の円滑さを重視している。

藩札は小額のものより高額の発行がよいとする。小札を多く受け取った時は打ち散ったり、両替に持ち来たらぬ、そのため、引換数が減るので銅銀に強みが出る。それで藩札の価値が上がるので、隣国からも流通を求めるようになり、国益が大であるとしている。藩札による利益を、このようにみている。

藩の利益をえるために、藩札の取り扱いについて、次のように言及している。

札ヲ拝借スル町人共ハ上納ヲ致スノ時、札ニテ上納ハ禁シラレ正金銀錢ヲ以上納ヲ致ス様ニ極メラルベシ、是上納ハ胴銀ト致サル、事ナレバ金銀錢上納ナリ

とあり、町人に藩札を貸付けた場合には、その返納を藩札でなせず、正貨で行わせることを説いている。町人からの正貨の吸収が計られている。

藩札発行が藩の利益の追求にあることは、金銀相場との関連でみていることから窺える。

御近国金銀錢ノ相場御国ヨリ高直ナル時ハ不釣合ニテモ不^ラ苦、此方ノ百目ノ金ヲ以テ他へ遣シ錢ニ両替ヲ致セバ百二十目トモナル、然レハ二十目ノ分ガ国益トナルナリ

とあり、金銀相場において、他領の方が高い場合は、そこと交換し利益をえることが可能と説いている。金銀相場が近領よりも、自藩のそれが低い時は、相場を聞き合わせ釣合わせておく必要があるとしている。金銀相場との関連で捉えていることは、領域によって相場が異なる状況を活用することが目論まれている。これは米価問題にも関連させていることにも現われている。近国の米価が領国より高値のときは、自領内の圀粃米は勿論として家中の配当米、百姓の余米を買い集め、それを凶作地で売れば多大の利益が出るとしている。この論調からすれば、自国が凶作の折の対応が問題になるが、その措置としては「上リノ御助成ナキニ及テハ金銀財宝ヲ人ニ取ラル、ノミ不^レ成、地面迄モ他邦ニ取ラル、ニ可^レ至ハ可^レ恐事ナリ」とあるように、藩の救助ということを求めている。藩に救助力がない場合は「御国産ノ品ヲ出サレテ、米穀ト交易ヲナシテ以テ御領民ノ御撫育ハ勿論非常ノ御備モ立置ルベキ事ナリ」と国産品の交易で米穀を確保するように主張している。国産品も凶作の折には潤沢にえられないこともあるので、この限りでは、凶作時の有効な対策とはなりえない。

金銀相場を重くみる主張をしているが、これは正貨流通を基軸に考えているのに由来するとみれる。他領の藩札が

領内で流通するのを防ぐために、銅銀の準備も不十分なまま発行することは良くないとする。その理由を二点から論述している。その一つは、諸藩の藩札は幕府の許可をえての発行でなく内密のものであるので、敢えてその例にならうのであれば、仕損じた折は名譽を穢すことになるとし、いわゆる名分論からの批判であり、その二つは、他領の藩札を領内で流通させないため、取り締りを強め、また、産物交易で金銀を獲得すれば、領国内の金銀流通が潤沢になり、藩札を発行しなくても済むとしている。

仁政觀に基づく政策論が展開されていたことからすれば、この主張は当然の論調ということになる。

正貨の流通を基軸とするにおいては、金銀錢の獲得が肝要であるとして、その手立を述べているが、国産品の運用に主点を置いている。

他邦ノ金銀錢ヲ御國中ニ集メ寄ル工夫ハ御國中一統日用ノ品物・雜具等ニ至迄、御國中ノ産物ヲ以用ヲ弁スル様ニ致シ、其余レル品物ニ又品物ヲ増シ加ヘ他邦ノ遣シ、御國中ニ無之日用ニ差支ル品物ト交易ヲナシ、又売払テ金銀錢ヲ取り来テ国用ヲナサシムヘシ

とあるように、国産品で領内の需給を賄つて藩内の需要に応じるようにし、余部が出た場合に領外に販売して金銀を獲得するように求めている。注目されるのは、藩内需要充足を第一義としてのことである。特産物生産に主体をおいたものでない。ここに三善庸礼の殖産論の特徴がある。すでに諸藩では藩専売政策がとられ、それでもって藩財政の運営をはかうとしていた時期だけに、三善庸礼の主張は時期的には、一つの特徴をもってみる事ができよう。

仁政が基軸におかれているため、国の繁栄についても、

御領中之者侍并諸御扶持人ハ勿論農工商ノ三民何モ身ノ分限ヲ弁ヘ、費ヲ省キ質素儉約ヲ守、貞実廉直ヲ本トシ苦ミヲ先トシ樂ヲ後ニスルノ心得ヲ教諭シテ、衆人能ク台点シテ行フ様ニナス時ハ國中自ラ富栄テ金銀米錢ノ集リ来ル事疑アルベカラズ

と説く。⁽¹⁸⁾ 身分秩序に従い、廉直に行動すれば、国は榮え、金銀が集まるといふ。三善庸礼の思考の基本は、このような道徳的秩序にある。

- (1) ・ (2) 「本論」一二三頁。
- (3) 同右一二五頁。
- (4) 〃 (8) 同右一四一頁。
- (9) ・ (10) 同右一六五頁。
- (11) 三善庸礼の藩札論については、作道洋太郎「前掲書」第四章参照。
- (12) 「本論」一七三頁。
- (13) 同右一七四頁。
- (14) 〃 (16) 同右一七五—一七六頁。
- (17) 同右一七八頁。
- (18) 同右一七九頁。

七、卷七ノ十一について

「御国家損益本論」卷七について検討しよう。卷六中でも、次のように述べた箇所がある。

國中ニ法令制度嚴ニ行ハレテ仁政下ニ及フ時ハ犯シ伺フ者サリナク、又法令制度不レ行仁政下ニ不レ及時ハ犯シ伺フ者多端ナリ、

仁政を基軸にした政治を説いている。この仁政論は各所に示されているが、国が乱れるのは、施政者の政治がよくないことにあるとしている。国法を守り上下が一致すれば国は豊むとしている。

仁政観が基調にあることは、时期的なものからすれば、やや観念的な主張にならざるをえない。つまり、徳目を政

治の根底におくことは、それ自体としては正当性をもつとしても、現実への対応という点では有効たりえなくなる。32
徳目を生かす方策が求められるからである。巻六は、このような点が多いので、「藩」国家論の検討ということでは、あまり詳細に考察しなくてもよいと思われる。

巻七の検討に移ろう。ここでは一四項目について論じている。まず、その初めは「御国中ノ産物ヲ弁スル仕方有之事」という項目である。「国中ニ産スル品物ヲ廐抹ニセズ大切ニ取扱ヒテ是ヲ国用トシ、他邦ノ品物ヲ不_レ用シテ可成丈ハ国中ノ産物ヲ用ヒテ事足ル様ニ可_レ計事也⁽³⁾」とあるように、国産品で需要を満すことを求めている。自給できない物品は「此方ノ有足ル品物ト交易シテ金銀ヲ無多ニ不_レ費⁽⁴⁾ノ工夫肝要ナリ⁽⁵⁾」と、国産品との交易で調達すべきとしている。領内需要を賄う基本は、産物の自給化においている。その思考の基本は、金銀銭の領外流出を防げるとするところにある。日用品で他領で製造されたものが多いが、これは国損であるので「産物ヲ製作シテ国用ヲナサシメント欲セハ、品ノ善悪ニハ不_レ可依、日用邦他ヨリ求テ仕フ雑品・雑器ニ至迄テ国中ニテ製作ヲナサシメ、其品物ヲ用ヒテ用ヲ弁スル様ニ致度モノナリ⁽⁶⁾」と品質を問題にせず、諸物品の国産化をはかるべきとしている。

自給化体制を基礎にした領国経済運営を提唱していたが、この場合、領内の物産流通には市を通じて盛んにすることを論じる。領内に七か所市場を設け「月ニ幾度ト度数日限時刻ヲ極メ、法則制度ヲ定メ⁽⁷⁾」と市立を行うことを求める。この市立に際しては、運上銀を徴収して運営資金にすることを提示している。「市ノ元ヲ成サルニハ元トナル金銀ナクテハ不_レ叶、其元ヲ拵ルニハ山ノ運上銀ヲ以シ、里ハ海里ノ運上金ヲ以テ元方ノ用ニ備ラルベシ⁽⁸⁾」と運上銀徴収によって、市設立の費用調達を説いている。しかも、市の運営は「市始リテヨリ町人ニ元方ヲ命シ置レ、御引上ニテ、上ヨリ成ナル、迄⁽⁹⁾」と最初は商人に委かせ、その後、藩営でなすとしている。運上銀を徴収して市費用に当て、市の運営を行うので、「御国家ノ御益ヲ生シ万民ヲ救助セラル、ノ一端ナリ⁽¹⁰⁾」とある。このような主張で果たして、市立が円滑に行われるかは、多分に問題を含むとみなされよう。

次の項目は、「御國中田地ノ古今ノ差別ヲ考へ、善惡ヲ正シ、上中下三段ノ位ヲ改メ正ス仕方ノ事」とい^⑩うのがあ^⑪る。

これは往時の田畑の品位付けや面積が現今では異なっているので、調査し直す必要があるとするもので、次のように指摘している。^⑫

御領中ノ田地ハ古ト今トハ大ニ違ヒ有事ナレハ、其差別ヲ考ヘテ土地ノ善惡ヲ糺シ、作物ノ古今ノ違ヒ遲速多少又地面ノ広狭・肥瘦、百姓ノ盛衰・厚薄等ニ至迄業ヲ尽シ理ヲ窮メ、能々正シテ古ノ位ヲ今ニ当ルノ位ニ立替悉ク免合ヲ可^レ極ナリ

土地の善惡が昔と異なっているので、それを明らかにして、相当な免を設定すべきとしている。初期検地に基づく品位付けが現状と相違しているとの指摘は、度々なされるが、要はその是正が可能かということである。これについては、何もふれていない。検討すべきと意図されながらも、具体的な方策が示されていないことは、三善庸礼がこの問題について現実的な対応をしていないことを示すものであろう。

本論の巻八について、若干検討しておこう。ここでは七項目にわたって意見が述べられている。「重職重役ノ人々勤務心得ノ事」というのがあるように、ここでは主に役職についての心掛けについてふれる所が多いが、その中にある「国ヲ富シ非常ノ備ヲ全ウスル仕方ノ事」というのがあるので、この項について少しみておこう。

国家ヲ豊饒ナラシメ目ニモ^ル見^ハ非常ノ備ヲ設テ全フセラル、ノ本ハ、百姓ヲ盛ナラシメ、商工ヲ励シ、士ノ数ヲ領知地行ニ量リ合セテ極メ、禄ヲ給リ、文武ノ道ヲ学ハセ、役人ニ可^レ用人物ヲ撰立貞実廉直ノ風儀トナシ、私欲竊偷^{ウチウチ}ノ出来心ヲ禁停シ、佞奸媚諂^{タタカ}ノ曲ヲ矯直シテ真直^{マコ}ナラシメ音物賄賂ノ路ヲ塞キ止メテ、以テ正々ノ士風ニ復サシメ質素儉約ヲ行ヒテ費ヲ省キ、侈ヲ戒テ謹マシメ一途ニ忠道ニ凝ラシメ、上下心ヲ一ニシテ勤メ行フ時ハ国豊ニ家富ミ兵強クシテ自ラ非常ノ備モ全ク整ルベキナリ、是国政ノ大事ニシテ深ク可^レ考事也

とある。^⑪ここには、いままで検討してきた国益論を大きく出るものではない。

農民の繁栄を計り、商工業を盛にならしめ、士族数を定め、役人は廉直な者を選らび、というように、一般的な枠内の論述でしかない。要は、どのようにして、このようなことが可能であるかだが、それについての言及はない。質素儉約を行い、上下心を一つにして勤めば国は豊かになり、家は富み、兵は強くなるとしている。この限りにおいては、抽象的域を出るものではない。道徳論的な色彩が濃く、現実性を帯びた論述がみられないのは、思弁的な考察であることを示すものであろう。

本論の巻九、十、十一は「諸御役人心得之事」、「御城中御普請役」、「大庄屋御役」などのように、役方の勤務に関するものが殆んどである。「一身ノ謹慎礼讓ノ行ハ勿論忠節ヲ的トシ身命ヲ抛チ潔白ニ勤テ終リヲ可レ全ナリ」と忠節を基軸にした役職勤務心得を述べる。廉直潔白を旨として勤務することが肝要という論調は、国益論としては、これまでとは異なったものになっている。この中であって、運上役、御臨時御役の中では、次のように述べられている。^⑫

御国産ハ宝ニテ土地ヨリ沸出ル物ナレハ日ニマシ月ニ増シ年ニ増シ殖テ後々ニハ大惣ノ御利益ト成ル事ナリ、是ヲ兼役ニ持セ置レテハ不レ宜、別ニ御国産方ヲ立ラレテ御役人ヲ撰ハレ命セラレタキモノナリ、是迄ノ儘ニテ差置レテハ何ノ役ニモ不レ可レ立（中略）故ニ御国産万宝ノ道ヲ開カレ金銀珠玉ヲ山ノ如リ積ミ野ヘラレテ富国強兵ノ業ヲ盛ニセラルベキナリ

と国産品増加策をとることが必要であり、そのためには、国産方を設けるべきとしている。運上銀を増加さす観点からここでは述べられているが、ここでも一般的な論旨を出ていないことが窺われる。それゆえに、役方勤務を中軸にして論述されている九巻から十一巻までは、国益論の検討ということからすれば、さしずめ考察を控えてもよいであろう。

- (1) 「本論」一五二頁。
- (2) 〽(4) 同右一八一頁。
- (5) 同右一八六頁。
- (6) 〽(10) 同右一八七頁。
- (11) 同右二一六頁。
- (12) 同右二四五頁。
- (13) 同右二五八頁。

八、むすびにかえて

以上、三善庸礼の「国家損益本論」を検討してきた。藩を国家として把握する思考は、すでに元禄・享保期にみられ、天保期には定着した概念になっているが、三善庸礼の国策論は、仁政観が基調になっている所に特徴があると思われる。施政者は清廉潔白であるべきで、上位者が行を正せば、下々は順応するという思潮であり、そのために道德論的な論述が目立つ。公平、誠実を旨に勤務することを役人に求める。また、忠義を強く説くのも、秩序意識が強いことからくる。しかしながら、この秩序意識も、將軍を頂点としたものでないところに特徴がある。国学論に由来するとみられる上位者の位置づけである。天照大御神から天皇に国法が由来し、將軍は委任された政治体であるとみなす思考は、藩国家概念と結びつけると將軍Ⅱ公儀を一層相対化するものになる。この相対化は自藩を優先さすという視点になり、自藩の利益という観点で諸問題が考察される。三善庸礼の論述の中で、將軍の位置が決して高くないことは、天道論と藩国家概念に由来しているとみなせよう。天保期という状況を考慮すれば、これは尊攘論に傾斜する内容を

持っていたということであろう。しかし、尊王論が將軍を頂点とする幕藩制的秩序と趣きを異にするところに成り立っているとするれば、三善庸礼の思考は必ずしも容易に尊王論に到達するものではないとみれる。仁政論と自給化政策論が基調になっているからである。

仁政を施政者の姿勢とするのは、天道論からすれば基本的なことということになるが、この仁政観による施政が強調されたのは、幕藩制初期から確立期である。仁政が貫徹できない状況下にあつて、それを説くことは思弁の域を出ないということになる。三善庸礼の論述が一般的な倫理基準を説くことが多いのも、このためであろう。仁政論と物品の国産化論を関連させたときの一つの事例をここに見ることが出来る。

三善庸礼のこのような国益論は、天保期という時期からすれば、必ずしも有効な政策論たりえないであろう。藩経済の自給化体制論は、宝暦・天明期に多くの諸藩でとられた政策であつた。天保期は、この政策の行き詰まりからくる新たな方向が打ち出されようとしていた時期である。とすれば、三善庸礼の国益論は、状況への対応ということでは、いささかずれているとみれるだろう。全体の論調が名分論的で現実性が少ないことは、三善庸礼が藩政への取り組みによって検討し思考して結実させたものでないことの反映であろう。藩士思考における一つのタイプをここに見出すことができるであろう。